

**留学生による日本の地域における「国際観光ガイドインターンシップ」実習の自己評価**

Self-evaluation of 'International Tour Guide Internship' Practicum in a Local Society in Japan by International Exchange Students

恒松 直美 (広島大学)

Naomi Tsunematsu (International Center, Hiroshima University)

総合学術学会誌 第15号 日本総合学術学会 2016年  
Journal of Society for Interdisciplinary Science, Vol.15  
Japan Society for Interdisciplinary Science, 2016

## 留学生による日本の地域における「国際観光ガイドインターンシップ」実習の自己評価

### Self-evaluation of ‘International Tour Guide Internship’ Practicum in a Local Society in Japan by International Exchange Students

恒松直美 (広島大学)

Naomi Tsunematsu (International Center, Hiroshima University)

#### Abstract:

This paper examines the self-evaluation of the ‘International Tour Guide’ internship by international exchange students. The total of eight exchange students from China, Korea, Germany, Australia, and Poland introduced as guides the local historical museum which has exhibited the development of ship building technology in the region and the history of trade and diplomacy of Japan with foreign countries. In the internship practicum, through their cooperation with the local city hall officials and local power actors, international student interns had opportunity to practically apply their language skills and their specialized knowledge on local history to their professional work as guides. This international experiential learning provided international students with new opportunities to acquire situated knowledge, to develop leadership skills to work with local people in Japan, and to examine their future career.

Keywords: International exchange students, Internship in Japan, Tourism, Local society, Evaluation

#### 1. はじめに—本研究の目的

本稿では、広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program, HUSA)<sup>1</sup>留学生向けの「グローバル化支援インターンシップ」授業において実施した「国際観光ガイド・インターンシップ」に関する留学生インターンの自己評価について考察する。日本の大学で留学してきた多国籍の交換留学生が地域行政と協働し地方の歴史的資産を紹介する「国際観光ガイド」実習は地域で地産地消の試みとなった。造船の技術の発展を日本の外交史や歴史とともに交換留学生が地域の人々に伝える実習の独自の点の一つは留学生が日本理解と国際的知見を生かした地域貢献により地域と対等な関係に立ち、主体として地域活性化について提案し学術知を実践知として活かす社会体験である点である。もう一点は、英語を使用する留学生も加わり文化多様な留学生の相互支援システムを構築し多文化性を得質として地域行政と協働したことにある。本稿ではその実習に関する留学生の自己評価を分析した。多国籍の留学生が「主体的」に地域住民と協働する体験学習の実践に関する研究やその自己評価の研究は日本では未発展

である。本実習は、地域における多文化共生の推進や地域活性が提唱される中、異文化性と日本の地域文化とが交錯する場を構築し新しい関わりを生み出した。地域と関わる多文化共生や異文化間理解の研究では宇都宮(2009)による多文化共生における教員による教育的枠組みづくりの研究や、江成ら(2013)による定住ブラジル人の子どもの地域での受け入れに対する日本人住民の意識調査など、留学生や外国人への支援という視点からの研究の発展が見られる。中本(2015)は外国人を支援の対象として捉える見解から、高度外国人材として地域のまちづくりに参画したり外国人の支援団体のリーダーとして活躍する主体として捉える見解へと多文化共生の動向が進展しつつある点を述べているが外国人や留学生が「対等」の立場で地域と関わる実践の研究はまだ十分発展していない。成人へと変容する過程で価値観を形成しつつ学びの意味付けをする時期にある留学生の主体的取り組みに関する自己評価の考察は、留学生が大学外の地域と関わり社会体験を持つ意義や異文化性と日本の地域文化とが関わり合う教育現場の持つ意義を考察する機会となる。外国人留学生の受け入れ拡大の戦略が策定され

る現在(文部科学省 2013: 2-3),留学生による日本の地域行政との協働学習に関する自己評価から得られる示唆は大きいと考える。

## 2. 本研究の背景:文化多様性を持つ留学生の異文化適応とインターンシップ自己評価の研究

日本企業が留学生の採用で重要視する項目として、日本語能力と日本のビジネス習慣や企業風土の理解を挙げる傾向があり(神谷, 2010),多国籍の留学生が日本語と英語を使用し文化多様性を活かしつつ日本の地域や団体と関わる実践の研究は国内で発展していない。多国籍チームのマネジメントや異文化に適応できる専門家育成の教育に関する海外の研究として、Voronchenko ら(2015)によるロシアの大学における多国籍の学生によるプロジェクト型授業の研究、アメリカの大学でのインターンシップで異文化に対応できる学びを促進する研究(Canady ら, 2011),異文化に対応可能なカウンセラー育成に関するインターンシップとアカデミックプログラムの研究(Peters ら, 2011),多文化間カウンセリングにおける異文化理解能力向上のための有効的訓練と異文化理解能力の個人的評価指標の研究(Manese ら, 2001)がある。また、カナダと中国の大学生による多国籍学生のプロジェクト型学習体験に基づく学生のスキルと自信向上に関する研究(Brennan ら, 2013)など異文化間能力育成の教育方法の研究の発展が見られる。

インターンシップの評価指標については国内でも発展が見られ、例えば、高等教育の質保障や学生支援の充実の視点からのインターンシップの再検討(手嶋 2010),インターンシップ履修学生と受け入れ施設・企業の意識調査の比較分析(竹沢ら 2011),インターンシップ参加学生の満足度と企業の学生評価との関連性の研究(亀野, 2011)などがある。海外の研究では学生・企業・大学の視点からのマーケティング分野のインターンシップの目標・構造・評価の研究(Alpert ら, 2009),海外インターンシップにおけるスキル活用に関する研究(Feldman & Bolino, 2000)などがある。しかし、文化多様性を持つ留学生が日本の地域と協働する実習に関する留学生の自己評価の研究はまだない。

Vandevver and Menefee (2006) は、国際的体験学習の価値として、外国語でコミュニケーションをとり

企画を進める実体験によるエンパワーメント、快適ゾーンの外での予想外の状況との遭遇による深い学び、慣れた状況外でのインタラクション、地域と国際との関係性に関する課題、文化と社会の機能に関する学びなどを挙げている。本研究は、留学生が、異文化性と日本文化が交錯し行動様式のモデルのない大学外の環境で、自身と他者との関係性を把握しつつ行動することを要する場での学びの自己評価である。

## 3. 地域の多文化共生推進と国際観光振興に関わる留学生の社会体験の意義

地域と協働するプロジェクト型インターンシップの成功の要因として留学生と地域の人々の双方に意義があり、留学生が自律性を感じて内発的動機付けを高めてエンパワーメントする(宮脇 2008, 620-621)ことが挙げられる。Kasim & Al-Gahuri (2015)は研究者は研究するコミュニティに対し相互依存の関係と平等なパワー関係を構築しつつ良好な関係を築き信頼を得ることが必要となると論じる(Enmel ら, 2007; Rist, 1981 参照)。同様に、留学生が地域と協働し社会体験を持つ実習現場の構築において、多文化共生の地域創りと国際観光振興と連携させることで、留学生と地域社会の双方に価値を生み出し対等のパワー関係を築けると同時に、留学生と地域住民の異文化受容性促進と地域での新しい価値観の形成ももたらすと捉えた。

留学生は、日本の国際的観光振興による地域活性化の施策に対し意義ある知見提供が可能であり、地域を世界に開く一助となる。1963年に制定された観光基本法を全面改訂し 2007年に施行された観光立国推進基本法(国土交通省観光庁)<sup>2</sup>では、「国際競争力の高い魅力ある観光地の形成」(第 12-14 条),「観光産業の国際競争力の強化及び観光の振興に寄与する人材の育成」(第 15 条・16 条)等が掲げられ、観光への国際的対応の向上が示唆されている。また、総務省が 2006年に発表した地域における多文化共生推進の施策として、外国人を生活者・地域住民として認識する視点の必要性が提唱され、日本の急速な人口減少への対応策として、日本社会の理解を深め、留学生の多文化共生の地域まちづくりのキーパーソンとしての参画への支援、地域住民等に対する多文化共生の啓発(総務省)、などが提唱されている。長門の造船歴史館のある呉市倉橋町の人口は2015年3月末日時点で、5,901人で、高齢化率(65歳以上)は46.4%<sup>3</sup>

の現状に鑑み、地域で留学生の若い力と新しい知見を活用したいとの声も強い。本研究は、留学生による体験学習の自己評価に加え、留学生間の異文化性の接触と異文化性が日本の地域文化と接触する場が生み出す意味と課題を提示するものとする。

#### 4. 国際観光ガイド・インターンシップ実施の背景と実習内容

2015年2月に呉市倉橋町「長門の造船歴史館」において実施した「国際観光ガイドインターンシップ」実習の背景及び内容の詳細について述べる。本企画の実現のため担当教員は地域関係者と連携し、留学生の来日後の実習に備えた。2014年6月・7月に10月開始の本実習の企画の承認のための会議を呉市役所産業部観光振興課及び地域関係者と開催し、留学生の外国人の視点を地域活性化の施策に生かす教育の場の構築の意義を伝えた。留学生は2014年9月末に来日し、10月末に開催した「長門の造船歴史館の国際的広報の施策」公開国際セミナーでは、歴史館の広報の施策案として、「倉橋（長門）島における歴史の物語ツアー企画」、「倉橋造船歴史館の国際化について」を2グループ（各グループ4人）が発表した。11月下旬実習内容の詳細決定のため、担当教員・留学生・市行政関係者による会議を開催し、教員の指導のもと留学生が作成した3日間の実習の予定表を提示し議論した。10月から実習まで毎週授業を行い、日本社会におけるマナー等に関する講義と実習の指導を同時に進行させた。

ガイド実習は造船技術の歴史的發展・日本の外交史・倉橋町史に関する知識習得を必要としたため、担当教員の引率により歴史館を訪問し館内をビデオ撮影した。学生は各階の展示品の解説を作成したり、ビデオを閲覧してガイドの反復練習を行った。2月14日～16日のうち、14日の午後に予行演習を行い、15日は倉橋フェスティバル参加とガイドを調整して行った。16日は、午前中にガイド実習、午後に地域関係者と反省会を行った。担当教員は全行程で観察・指導・助言を行い、地域行政への電話連絡や電子メール連絡の実践も学生に体験させた。

##### 1) 呉市倉橋町「長門の造船歴史館」での国際観光ガイド

2月15日は、約1時間の日本語と英語のガイドを午前と午後各1回ずつ2人で行った。16日は、呉市産業部観光振興課が市民の「国際観光ガイドツアー」（14名参加）を企画した。両日の歴史館の訪問者数は127名であった。

##### 2) 呉市「倉橋フェスティバル」のステージ出演

地域団体が地域特産物の販売等を行う産業祭である

「倉橋フェスティバル」（第17回目）のステージ参加を行った。インターンは倉橋観光ボランティアガイドの会と共に出演し、ガイド紹介、倉橋町のおみやげ品の提案、その投票依頼及び投票結果発表を行った。地域関係者の報告では本年度の参加者数は約1万2千人とされる。

##### 3) 倉橋のお土産品とマスコットの投票依頼

インターンが宣伝のプラカードを持ち、会場にいる地域の人々に投票をお願いして回り行動力を試される場となった。投票の総合計は約120票であった。

#### 5. 調査概要

##### 5.1 調査対象者とその背景

本調査の分析対象を2014-2015年度「グローバル化支援インターンシップ」受講者で、2014年10月の準備開始から2015年2月のガイド実践までを含む「国際観光ガイド実習」を行った広島大学短期交換留学プログラム(HUSA)留学生8名とした。ガイド実習実施時点で留学生の詳細を表1に示した。<sup>4</sup>

表1. 留学生8人の特徴（2015年2月時点）

国	韓国・中国・オーストラリア・ポーランド・ドイツ（5か国）
性別	女子学生4人・男子学生4人
学部・大学院	学部生6人・大学院生2人
年齢	21歳（4人）/20・22・23・27歳（各1人）
日本在住歴	2014年9月末～2015年2月 *1人日本の小学校に2年通学（中国出身）
専攻	文化人類学・情報テクノロジー・日本語・日本研究・政治学・国際ビジネス
日本語能力	上級レベル6人（中国4・韓国1・ドイツ1） 中級レベル2人（オーストラリア1・ポーランド1） *「上級」は授業の受講が可能なレベルとする *ドイツの留学生は「中級」と位置付けられるが、日本語でガイドに挑戦したため「上級」とした
英語能力	母国語者1人（オーストラリア）・上級レベル2人（ポーランド1・ドイツ1）・中級レベル5人（中国4・韓国1） *「上級」は授業の受講が可能なレベルとする
ガイドでの使用言語	日本語使用6人（中国4・韓国1・ドイツ1人）・英語使用2人（オーストラリア1・ポーランド1）

出典：筆者作成

##### 5.2 調査方法

本研究では、2014年10月の授業開始時の企画準備から2015年2月のガイド実習までの全行程の教員による参与観察と2015年2月末の実習後のインタビューを基に分析する。実習終了後、「評価カテゴリー」・「評価項目（概要）」・「評価項目（詳細）」を提

示した自己評価シート(表 2)を学生に配布し,3 月初旬,各項目について1~2時間の1対1の半構造化インタビューを教員の研究室で行った。日本語上級のアジア圏の学生は日本語,日本語中級の西欧圏の学生は英語で行った。HUSA プログラム参加の語学要件は「英語又は日本語で授業の受講が可能」であり,十分意志の伝達が可能であると判断した。詳細に渡り指導した教員と学生との信頼関係をもとに学生のナラティブにより自己評価を引き出し,評価項目に関する語りを即コンピューターに全て文字入力した。開始前に,話したいことのみ自由に話すこと,秘密を厳守し本人の特定が可能な形で論文等に記載しないなどプライバシーへの配慮を明確に伝えた。

### 5.3 調査内容

留学生による実習の自己評価の指標を決定するにあたり,前述した先行研究の評価項目を参照するとともに,文化多様性を持つ留学生が日本の地域と協働で企画を実行するために必要となる「1. 日本語・日本文化」,「5.異文化理解」の評価項目を含め総括的に自己評価を行う指標を考察した。留学生が行政や地域の人々と協働で実習を行うために必要となる能力・技能などの力を総括的に捉える「評価カテゴリー」として,1. 日本語・日本文化,2. 他者との連携,3. 仕事の理解,4. 人間関係形成能力,5. 異文化理解,6. 汎用的技能,7. キャリア構想,の7項目を設定した。さらに,調査カテゴリーを「評価項目(概要)」に分類し,その下位概念として「評価項目(詳細)」を設定した。

## 6. 分析と結果

### 6.1 分析方法

留学生と地域行政及び地域団体との関わりや文化多様性を持つ留学生間の人間関係の構築に関わる評価や自身のスキル・能力評価を含む多角的な自己評価という点から,学生のナラティブを重要視し,教員が指導する過程で観察した学生の困難も含め分析した。学生の述べた内容は多岐に渡り,複数の項目に関連性があるため,インタビュー後,記録した内容を最も適切と思われる項目に整理し直し,アジア圏(中国・韓国)4人と西欧圏(オーストラリア・ポーランド・ドイツ)3人とで分類し,表を作成して考察した。アジア圏4人に関する表の一部を抜粋示した(表 3)。さらに「課題」(学生が今後の成長課題として捉えている内容)と「達成・成果」(学生が習得し

たと捉えている内容)に関する要約を「アジア圏」と「西欧圏」に整理し一部を提示した(表 4)。

## 6.2 分析結果

### 6.2.1 実習におけるインターンの使用言語

アジア圏の留学生は日本語を使用し,西欧圏の学生は主に英語を使用した。西欧圏の学生は日本語能力が中級であることから困難を感じたと想定できるが自己評価は低くはない。その要因として実習への

表 2. 自己評価シートの評価項目

評価カテゴリー	評価項目(概要)	評価項目(詳細)
1. 日本語・日本文化	1) 日本語能力	企業・市役所等との電子メールでの連絡 企業・市役所等との電話対応・仕事における日本語使用
	2) 日本文化理解	日本社会の内・外や上下関係を意識した対応
2. 他者との連携	外部と連携する力	地域企業・市役所等の訪問・会議時の儀礼 地域企業・市役所等との電話・メールによる連絡 市役所等・地域の人々との関係性の構築
3. 仕事の理解	仕事についての理解	担当する仕事の目的・目標の理解 仕事の内容と流れの理解
4. 人間関係形成能力	留学生インターン間の連携・地域の人々との連携	チームワーク能力・協調性 人間理解・他者と円滑に人間関係を構築する能力 決断力(チームの中で決定を導く力) 責任感(責任感を持ってメンバーと仕事を進める力)
5. 異文化理解	異文化コミュニケーション能力	文化や価値観の多様性の受容 異文化の人とのコミュニケーション能力
6. 汎用的技能	1) 礼儀作法・マナー	挨拶
		身だしなみ
		実習中の言葉づかい
	2) 知識応用力(実行力・能動的行動能力)	自分の持つ知識を仕事に活かす能力(情報リテラシー)
		テクノロジーを活用する能力(PCなど)
		創造性・新しいアイデアを生み出す力
		問題を理解・把握する能力・課題発見力
		問題解決力
		仕事を計画する力(計画力)
		3) 態度・志向性(社会人基礎力・就職基礎能力)
活発な討論能力		
リーダーシップ・積極性		
他のインターンに働きかける力		
情報を他のインターンに発信する力(発信力)		
チャレンジ精神・探究心		
7. キャリア構想	キャリア目標の設定	自分の特性についての気づき・自己発見
		将来の進路の展望
		元気・明るさ
		分からないことを質問し、教を請う態度

出典：筆者作成

挑戦の評価や教員の前で謙遜する態度を示す意識がアジア圏の学生と比較し薄いことが挙げられる。

### 6.2.2 インタビューの分析と参与観察

次に各評価項目のインタビュー内容を参与観察とも関連づけつつ分析し提示した。

#### 1. 日本語・日本文化 1) 日本語能力

「日本の敬語に対して自信がない」と述べるなど、上下関係や内と外との関係性を把握した適切な敬語使用が必要となる現場体験により、社会で必要とされる日本語能力の高さや文化理解の困難を認識し自己を厳しく内省している。会議で聞き取れない部分を予測する重要気づきなど、難易度の高い日本語能力を理解する術を習得しつつある。公式の場での敬語使用や日本の行動様式を理解を高めるため、よりレベルの高い他の留学生を観察し学ぶ傾向にある。

#### 1. 日本語・日本文化 2) 日本文化理解

「能力も高くなった」、[相手の反応とか、先生から学んで真意をして]のように地域関係者が集まる企画会議等への参加体験により日本的義理の習得を実感している。「まだ学生。一般社会と違う。学生だから尊重」、[学生で甘えさせてくれる]からは学生が敬い寛容扱われる現実の認識が伺える。西欧圏の留学生は日本文化理解の困難を吐露しつつ、「インターンシップなしではまだ特別扱われる『外国人』」と述べ、大学内での特別扱いと実社会の相違を知る重要性を指摘した。

#### 2. 他者との連携 (外部と連携する力)

メールの書き方や挨拶、「人は心の生き物」など人への対応能力が鍛えられたと述べた。「人がとても優しくて本当の仕事もできる」、[相手と平等]は地域社会性への貢献となる仕事により何らかの力を発揮したことへの評価である。

#### 3. 仕事の理解 (仕事についての理解)

準備段階で仕事内容と仕事分担の詳細なファイルを教員の指導のもとに何度も改訂する作業を通じ、「大変勉強になった」、[感動した]と述べ、責任を持ち仕事をする厳しい態度と努力に心を動かされている。「経験が少ないうちからどうしたら良くなるのか分からない」など戸惑いもある。活躍する他の学生の仕事を綿密に観察して実践力をつけようと模索する姿もあった。

#### 4. 人間関係形成能力 (留学生インターン間の連携・地域の人々との連携)

「チームワーク」、「一人でできる仕事はないと思う。個性を發揮して、自分のできる範囲で仕事」はチームワークによる成果への評価であり、「考えが違う。同じ国でも違う。全然」、「一緒に問題を解決して仕事をする」は文化や個性の違いを乗り越え協力した体験の評価である。「レディを人として深く知ることができ、本当の友情を感じた。双方の思いを感じ取れ

表 3. 自己評価に関する留学生インターン(アジア圏)へのインタビュー内容 (一部抜粋)

		留学生インターンの特徴	
		出身地域	アジア(4人) [中国・韓国]
		日本語能力	上級
		英語能力	中級(簡単な会話は可能)
		専攻	日本語・文化人類学・情報テクノロジー
評価カテゴリー	調査項目(概要)	調査項目(詳細)	インタビュー内容
1. 日本語・日本文化	1) 日本語能力	企業・市役所等との電子メールでの連絡	もつとすごい人達を見た。ここに1年かいる。上手な人。私も勝負根性ある人。時間的なもの関係なく、自分は下手、と実感している。
	企業・市役所等との電話対応・仕事における日本語使用		友達とのコミュニケーションはできるが、上の人と話す時、表現がビビる。外国人だから理解してくれると思うが、日本人と日本人と思うと未熟。外国人の学生という立場としては、自分は日本の敬語に対して自信がない。* * 電子メール、電話対応。まだ勉強が必要じゃないかな、と思う。怖い、という感覚はなくなった。* * 今は、ほかの学生のメールをみたら、笑う。失礼。名前も連絡先も、ない。他の友達の見ると笑う。* * いろんな人と話し合う時もガイドをした時も、力が高くなったと思う。今でも分からないことが多いので、想像する能力が重要。
	2) 日本文化理解	日本社会の内・外や上下関係を意識した対応	あれは自信ある。あたりまえのものが多かった。距離感なかった。生活の部分は違うかもしれませんが、組織生活は似ている。[自国は]もつと厳しい。もつと強制的。意見とかは絶対出さない。* * 言葉使いを除いたら、行動自体は自信あり。* * 最初に挨拶とか、(倉橋フェスティバル)ステージに行った時にも。自治会長に挨拶に先生と行った。その前の自分には考えられなかった。* * 自分はあまい、と思った。* * 「内」「外」理解できる。日本独特の文化。* * 日本の社会の中で、意識。相手に対する感謝。* * 企業とか、連携、について理解できて、知識も活用も、前よりよくできると実際に、人と話し合っただけで、話し合ったり、実際に応用して身に付けたと思う。

出典：筆者作成

た」、「インターンシップなしではあり得なかった」との西欧圏の学生の意見から、本実習が異文化の留学生間の絆を生んだことが分かる。学生の相互支援のため導入したレディ制度が学生間の必然的な関係性を生んでいる。「いろいろな経験を持つ社会人と話すのはおもしろい」、「地域の人も褒めてくれた」、「距離感がなくなった」など地域とのつながりも評価している。

#### 5. 異文化理解 (異文化コミュニケーション能力)

アジア圏の学生が、西欧圏の留学生の集団より個人を重要視する行動や仕事を自由に捉える発想に対し戸惑いを見せ、西欧圏の学生はアジア圏の学生の仕事への態度が真面目すぎると述べた。Hofstede(2011)は文化的距離の理論で、文化の相違の要因として集団主義と個人主義や権威への態度の違いを挙げているが、集団の尊重や仕事への真剣さに関する西欧圏の学生の態度についての不満をアジア圏の学生が述べた。同時にア

アジア圏の学生は、英語力の向上や異なる思考を学ぶ意味からも西欧圏の学生の参加を要望している。「欧米人とか英語圏とかアジア圏以外の人達とコミュニケーションする時は緊張する」、「アメリカ、カナダなど欧米系の学生は中国人の学生とは交流しない」と述べ、留学生が分離する状況下、本実習が単独の場となり異文化の価値観を体験する場となったと評価した。

### 6. 汎用的技能 1) 礼儀作法・マナー

大学外の公式の場面での敬語使用など礼儀の習得レベルを厳しく評価している。「授業を受けた学生と受けていない学生は違う。大変は大変ですが、やはり価値は違う。日本社会は厳しいので(先生の指導)は厳しくて当然。」からは、授業で習得した礼儀や敬語使用に関し自己の成長を実感している。会議や実習現場で教員からの指示で初めて

挨拶の必要生気づくなど「自分はまだ」と指摘した。

### 6. 汎用的技能 2) 知識応用力 (実行力・能動的行動能力)

日本歴史や地域史を勉強して日本の人に伝えた経験により日本社会に同化した感情が喚起されたり、賞賛されたことで自身の存在感を実感している。「社会の表面的なことだけをしたら満足できない。もっと深いものを知りたい」とフィールドワークへの興味を増した学生もいた。「何かができる」との思いからデザイン能力を生かし英語で現地紹介レポートを作成した学生は技能を生かす価値を述べ、「ビジネスの授業での学びが役に立っていた」と実社会の経験生への対応の困難を吐露した。全体を把握し行動する困難も実感している。「状況や人の立場はどうすれば判断できるのか」と仕事をするうえでの総合力の不足を戒める姿もあり、今後経験を積み過程

表 4. 「課題」・「達成・成長」の観点から抽出された概念 (アジア圏・西欧圏) (一部抜粋)

評価カテゴリー	評価項目(概要)	評価項目(詳細)	アジア圏		西欧圏	
			「課題」に関する内容の要約	「達成・成長」に関する内容の要約	「課題」に関する内容の要約	「達成・成長」に関する内容の要約
1. 日本語・日本文化	1) 日本語能力	企業・市役所等との電子メールでの連絡	日本語能力がより高いインターンによるより高い目標	日本社会の電子メールや電話のマナーの習得 / メールでの礼儀の習得	公式の場で通用する電子メールや話し言葉の習得	
		企業・市役所等との電話対応・仕事における日本語使用	場面やヒエラルキーに応じた日本語の敬語の使用 / 異なる世代の人が話す日本語を理解する力 / 言いたいことを的確な表現で伝える力の習得	相手に分かりやすい方法で伝える重要性の理解 / 知らない日本語を文脈から想像する力の習得	日本人との交流に対する積極的態度 / 大学外の社会人と対話できる日本語能力の習得 / 公式の場で使用できる日本語能力の習得	日本語能力の高い他のインターンの観察による言語と行動様式の学び
	2) 日本文化理解	日本社会の内・外や上下関係を意識した対応	社会・組織における仕事において自分の立場を判断し動く力の習得 / 日本社会で期待される行動様式の理解	自身の国の上下関係の概念との類似に基づく自信 / 日本的マナーを実践の場で習得 / 現実的場面での内と外の理解 / 実践の場で応用したことによる日本語の実践的能力の習得		日本社会での外国人への特別扱いと日本人に対する現実的見解 / 実際のインタラクションによる日本の上下関係についての理解 / 上下関係を理解して敬語が使用できる他のインターンの観察による敬語の理論的理解 / 日本社会におけるヒエラルキーの観察と理解
2. 他者との連携	外部と連携する力	地域企業・市役所等の訪問・会議時の儀礼		挨拶・メールの書き方の儀礼と確認作業の理解 / 人との対応の仕方についての学び		
		地域企業・市役所等との電話・メールによる連絡		相手の気持ちを考えつつ外部と連携する重要性の理解		
		市役所等・地域の人々との関係性の構築		自分のアイデアを伝える力の習得 / 日本の社会人と対等の立場で仕事に従事した経験		

出典：筆者作成

で学べばよいと教員が指導した。

### 6. 汎用的技能 3) 態度・志向性 (社会人基礎力・就職基礎能力)

「インターンシップは自分が考えたことを言える」など能動的に動く価値を認識している。友人関係にある他の学生にリーダーとして「指示を出すのが難しい」と述べ、人を動かす企画を進める困難を吐露した。ガイドの準備では「練習したり、暗唱したり、みんなの能力はすごい」など真摯な態度で仕事をしたことへの自信を述べた。また、「普通な社会で体を痛めて学

ぶものだと思うが、今回は大学で学べていいと思う」のように実数の習得を高く評価している。

### 7. キャリア構想 (キャリア目標の設定)

自分の力で新しい情報を収集してガイドに臨んだ経験により、「もっと勉強したい」、「私か今のままでできるものならおもしろくない。もっと深い部分まで見たい」と研究意欲を喚起した例があった。難易度の高いガイドの成功から「留学生でもできる」と手ごたえを感じている。日本留学により将来のキャリアを決定する意思が自身の力量不足の認識により変容し、「現実

は残置」と述べた学生もいた。現在の力で将来を決めず、これから可能性を伸ばす重要性を教員から伝えた。日本語中級の留学生は「日本語が得意でなくとも何か日本に貢献できる」と述べ、自国での日本人向け観光ガイドなど、日本と関わる仕事の可能性を模索している。「常に先生が自分が参加する価値を伝えた」ことで自分の参加の意義を見いだせたとの見解を述べた。

## 8 結論

留学生が日本の地域社会と出会い、協働で仕事をする場で期待される文化的規範は日本の地域社会の規範であり行動様式である。それを順応して初めて地域参画への門戸が開けると言っても過言ではない。実習現場が地域社会であり、地域の規範に基づき運営が行われる環境では、留学生が現地の規範で評価され、現場への順応が期待されるのが当然の成り行きであろう。同時に英語によるガイド提供など、住民が新しい体験をもたらす点や文化多様性を包含する特殊な留学生の集団であるからこそ特別に評価される面もある。留学生自身、文化多様なグループを構成することで相互に異なる思考様式を学んでいる。その多様性を地域と結び役柄を高度の日本語能力を持つ留学生が担い、日本的規範をもとに地域行政とつながり、多国籍の留学生の地域参画が異文化間理解を育む場をもたらす構図がある。本研究はその構図の中で顧客や支援される外国人という立場を超えて地域と関わる実習の場で、留学生が文化多様性を活かし、主体として日本の地域社会との関わり方を試行錯誤して探る実体験を通じて留学生が自己評価したものである。

異文化間能力をつけるには意図的に異文化の人と学習する場を構築することが必要である。星野(2007)は異文化間教育と多文化(共生)教育の多様な課題別分野に関する概説において、異文化間資質能力の研究(山岸 1995,1997)や学生参加型の主体的活動(授業)と多文化が地域・学校におけるフィールドを経験して教職員に必要な多様な資質・能力の研究(森茂 1984)などから伺える異文化間教育の多元性を指摘しつつ国内におけるその教育機会の不足を述べ、多文化社会に身を置いて学ぶ必然性を説く。本実習の特色として留学生間での異文化性への対応と留学生による日本の地域への対応という二側面において異文化間の交わり方を留学生が試行錯誤した点がある。福島(2014: 143-145)は、『『グローバル化』は国民国家が保証する単一のコミュニケーション空間を複雑化・多元化し、固定的なアイデンティティを可変的で文脈的・関係的なものとする』と論じているが、本研究の実習現場は文化多様な留学生と日本の地域文化とが交錯する可変的かつ多元的な文化空間であった。

本研究における留学生の自己評価は、日本社会の現場での適切な挨拶や敬語使用と社会人との関係性など日本の行動様式に関する評価と、異なる価値観を持つ留学生間の関係性の中で皆で協働し企画を実行する力の評価、という二重の異なる文化的パラダイムで自身を評価するものとなった。留学生は地域との関わりの中で内と外や上下関係を把握した日本的行動様式を習得しようとし、留学生間では英語や日本語を相互に学習しつつ異なる価値観の理解力を高めようと模索した。自らの力で知識を習得し生かした時、自身の可能性を感じ、感動し、その価値を再確認し、新たな機会へとつなげている。留学生の模索から見えてきたのは、主体として留学生と地域が文化多様性に対応する力をつけていく教育と研究の必要性である。留学生による文化多様性への主体的挑戦がその一步を提示している。

## 【注】

- (1) 以後、「広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program)」を「HUSA プログラム」と称する。広島大学は2015年11月時点で、北米・ヨーロッパ・オセアニア・アジアの24カ国66大学及び2コンソーシアムと全学協定を締結し、毎年約40名の交換留学生を約1年間受け入れている。
- (2) 国土交通省観光庁ホームページにある「観光立国推進基本法(条文)」参照。
- (3) 呉市「年齢別人口統計」(住民基本台帳)(平成27年3月末現在)参照。
- (4) 2015年2月末、不慮の事故により学生の1名が死亡したためインタビューは7名のみとなった。

## 【引用文献】

- [1] 宇都宮裕章(2009)「多文化共生社会の根ざす環境づくり：仲介的役割を果たす教員」『日本教育大学協会研究年報』第27号, 39-51頁。
- [2] 江成幸・藤本久司・福本拓・長尾直洋(2013)「定住ブラジル人の子どもを地域こどう受け入れるか - 三重県北部での日本人住民調査 -」『人文論叢(三重大学)』第30号, 23-37頁。
- [3] 神谷順子(2010)「日本における外国人留学生の就業に関する研究 - 大学・企業・行政との連携による就職支援の効果 -」『北海学園大学学園論集』第143号, 67-91頁。
- [4] 亀野淳(2011)「インターンシップ参加学生の事後満足度と企業の学生評価との関連性に関する研究 - 北海道大学の事例をもとに -」『インターンシップ研究年報』第14号, 1-8頁。

- [5] 呉市「年齢別人口統計」(住民基本台帳)(平成27年3月末現在)(呉市役所倉橋支所提供)
- [6] 国土交通省観光庁「観光立国推進基本法(条文)」(<http://www.mlit.go.jp/kankocho/kankorikkoku/kihonhou.html>)<2015年6月4日アクセス>
- [7] 総務省「多文化共生の推進に関する研究会報告書－地域における多文化共生の推進に向けて－(平成18年3月)」([http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000198586.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000198586.pdf))<2015年5月9日アクセス>
- [8] 竹沢昌子・出口宝・平野貴也・仲田好邦(2011)「2年生必修科目のインターンシップの評価に関する研究－インターンシップ履修学生及び受入施設・企業に対する意識調査の比較分析－」『名桜大学紀要』第16号, 191-219頁。
- [9] 手嶋真介(2010)「大学におけるインターンシップの再検討－質保障と学生支援の充実に関する考察を中心に－」『東邦学誌』第39巻第1号, 1-9頁。
- [10] 中本真一(2015)「多文化共生政策を視野に入れる留学生受け入れ－地域国際交流を再設計する－」ウェブマガジン『留学交流』2015年7月号第52巻(<http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/07.html>)<2015年11月1日アクセス>
- [11] 福島青史(2014)『「グローバル市民」の「ことば」の教育とは－接続可能な社会と媒体としての個人－』西山教行・平畑奈美(編著)『「グローバル人材」再考－言語と教育から日本の国際化を考える－』くろしお出版, 138-168頁。
- [12] 星野命(2007)「異文化間教育と多文化(共生)教育における教師と教師教育[総編]」『異文化間教育』第25号, 3-22頁。
- [13] 宮脇秀貴(2008)「内発的動機づけとエンパワーメント－自律性の支援の連鎖が生み出す組織の活性化－」『香川大学経済論叢』第80巻4号, 57-110頁。
- [14] 文部科学省(2013)「世界の成長を取り込むための外国人留学生の受入れ戦略(報告書)」([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/1342726.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1342726.htm))<2015年12月4日アクセス>
- [15] Alpert, F., Heaney, J., Kuhn, K. L. (2009). Internships in marketing: Goals, structures and assessment – Student, company and academic perspectives. *Australian Marketing Journal*, 17, 36-45.
- [16] Brennan, R. W., Hugo, R. J., & Gu, P. (2013). Reinforcing skills and building student confidence through a multicultural project-based learning experience. *Australian Journal of Engineering Education*, 19 (1), 75-85.
- [17] Canady, B. E., Rivera, M., Gerdes, J., Ford, A., Johnson, K., & Nayak, N. (2011). Cultural roadmap: Developing cultural learning strategies during internship. *Training and Education in Professional Psychology*, 5 (1), 30-37.
- [18] Feldman, D. C. & Bolino, M. C. (2000). Skill utilization of overseas interns: Antecedents and consequences. *Journal of International Management*, 6, 29-47.
- [19] Hofstede, G. (2011). Dimensionalizing cultures: Hofstede model in context. *Online Readings in Psychology and Culture*, 2 (1) (<http://dx.doi.org/10.9707/2307-0919.1014>)<2015年5月9日アクセス>
- [20] Kasim, A. & Al-Gahuri, H. A. (2015). Overcoming challenges in qualitative inquiry within a conservative society. *Tourism Management*, 50, 124-129.
- [21] Manese, J. E., Wu, J. T., & Nepomuceno, C. A. (2001). The effect of training on multicultural counseling competencies: An exploratory study over a ten-year period. *Journal of Multicultural Counseling and Development*, 29 (1), 31-40.
- [22] Peters, H. J., Krumm, A. J., Gonzales, R. R., Gunter, K. K., Paez, K. N., Zygowics, S. D., & Haggins, K. L. (2011). Multicultural environment of academic versus internship training programs: Lessons to be learned. *Journal of Multicultural Counseling and Development*, 39 (2), 114-124.
- [23] Vandever, R. & Menefee, M. L. (2006). Study abroad, international internship and experiential learning: A world-class adventure in learning. Proceedings of Southwest Decision Sciences Institute. Oklahoma City, OK, 200-207.
- [24] Voronchenko, T., Klimenko, T., Kostina, I. (2015). Learning to live in a global world: Project-based learning in multicultural student groups as a pedagogy of tolerance strategy. *Procedia – Social and Behavioral Sciences*, 191, 1489-1495.